

生活に満足している人は幸福か — SSP-W2013-2nd 調査データの分析 —

小林盾、カローラ・ホメリヒ

【要約】

この論文では、生活満足度が主観的幸福感と一致しているのかを検討する。ともすれば、生活に満足している人は、幸福であるとみなされがちである。しかし、このことは自明ではない。満足していても不幸と坎じるかもしれないし、不満があっても幸福かもしれない。そこで、2013年社会と暮らしに関する意識調査(SSP-W2013-2nd)をデータとしてもちいて、分析をおこなった。その結果、以下がわかった。(1)満足と幸福が一致しない人は、全体で23.4%いた。そのうち「生活に不満があるのに幸福」というポジティブな不一致の人は、不満な人のうち3割いた。とくに60代で45.9%と多かった。逆に「満足しながら不幸」というネガティブな不一致は、1.5割いた。とくに未婚者で27.9%と多かった。(2)女性ほど、年配者ほど、既婚者ほど、世帯収入が多いほど、「不満だが幸福」というポジティブな不一致がふえ、「満足だが不幸」というネガティブな不一致がへった。ただし、学歴や従業上の地位による違いはほとんどなかった。以上から、生活満足度と主観的幸福感とはたしかに似た概念であるが、同一視するには慎重であるべきだろう。

【キーワード】

幸福、主観的幸福感、生活満足度、不一致、社会階層、社会意識

1 問題と仮説

1.1 リサーチ・クエスチョン

国際通貨基金によれば、日本人の一人当たり名目国内総生産(GDP)は、1980年9312米ドルから、1990年2万5140ドル、2000年3万7304ドル、2010年4万2917ドルといっかんして上昇してきた。2012年には4万6707ドルで、世界12位であった。

一見すると、所得がふえ生活が豊かになれば、人びとは幸福になるように見える。しかし、Easterlin(1974)は国際比較の結果、国ごとの所得水準と幸福度の間に明確な相関がないことをしめした。これは「幸福のパラドクス」または「イースタリン・パラドクス」とよばれる。

では、なぜパラドクスがおこるのだろうか。もしかしたら、「生活に満足すること」を「幸福」と区別してこなかったためかもしれない。白石・白石（2010: 10）は「幸福感にかんする代表的な指標としては主観的幸福感と生活満足度がある」とし、互換的にもちいている。

このように、ともすれば「生活に満足している人は幸福」であり、「不満な人は不幸」だろうとみなされがちであった。しかし、このことは自明ではない。満足していても不幸と感ずるかもしれないし、不満があっても幸福かもしれない。

そこで、この論文では「生活に満足していることが幸福であることと一致するのか、しないとなればどのような場合か」というリサーチ・クエスチョンを検討する。この問題を解明できないと、満足しながら不幸な人がいても、みすごされてしまうかもしれない。

これまで Sirgy（2012）は、欧米で生活満足度が主観的幸福感とかならずしも一致しないことをしめした。この論文では、日本社会の場合どうなのかを分析していく。

1.2 仮説

満足度と幸福感の一貫性をしらべるために、以下の仮説を検証していく。まず、不一致の可能性について検討する必要がある。

仮説1：生活満足度と主観的幸福感が一致しない人があるだろう。

つぎに、不一致となるのはどのような人びとだろうか。ここではとくに、学歴、職業、世帯収入といった社会階層との関連に着目していく。一致していない人のうち、「不満だが幸福な人」は、不一致ではあるが、前向きでポジティブな状態といえる。たいして「満足だが不幸な人」は、いわば後ろ向きでネガティブな不一致といえる。

仮説2：社会階層が高い人ほど「不満だが幸福」というポジティブな不一致が多く、社会階層が低い人ほど「満足だが不幸」というネガティブな不一致が多いだろう。

2 データと変数

2.1 データ

2013年社会と暮らしに関する意識調査（SSP-W2013-2nd）をデータとしてもちいる。主観的幸福感と生活満足度の両方を質問し、さらに階層変数を多数ふくむからである。調査の概要は表1のとおりである。分析では、必要な変数すべてに回答した2,497人を対象とする。

2.2 従属変数

従属変数は「主観的幸福感」である。つぎのように質問した。これは国民生活選好度調査と同じ

表1 2013年社会と暮らしに関する意識調査 (SSP-W2013-2nd) 調査の概要

調査方法	インターネット調査
調査期間	2013年11月28日～12月9日
母集団	全国に居住する(2012年12月31日現在)満20～64歳の男女個人
計画標本とサンプリング	計画標本3000人を、人口比によって47都道府県と10歳ごと5つの年齢階級の235セルに割当て目標回収数をさだめた。調査会社の登録モニターに調査依頼を配信し、回収標本の男女比がほぼ同数となるようにした
有効回収数	2,922人
分析対象	2,497人(内訳は男性56.2%女性43.8%、20代15.3%30代23.6%40代24.8%50代22.2%60代14.1%、未婚29.2%既婚64.9%離死別6.0%、中卒1.4%高卒34.5%短大・高専卒11.4%大学・大学院卒52.6%、正規雇用・役員43.9%非正規雇用17.7%自営・家族従業員・内職11.4%無職27.1%、世帯収入549万円以下52.7%1049万円以下39.4%1150万円以上7.9%)

質問で、主観的幸福感を測定するために国際比較でもっとも用いられている形である(主観的幸福感の測定については島井他 2004 参照)。

質問：現在、あなたはどの程度幸せですか。「とても幸せ」を10点、「とても不幸」を0点とすると、何点くらいになると思いますか。(1つだけ)

選択肢：0点 とても不幸 1点 … 9点 10点 とても幸せ

11段階あり、0点と10点だけに意味が付与されている。0～4点がどちらかといえば不幸、5点が中間点、6～10点がどちらかといえば幸福となる。「わからない」という回答は分析から除外した。

分布は図1となった。中間点である5点が20.3%と最多だった。6～10点の合計57.1%の人が幸福とかがえており、この比率は(国民生活選好度調査、世界価値観調査、日本版総合的社会調査など)先行研究とおおむね一致している。分析では、0～5点の「幸福ではない人」42.9%と、6～10点の「幸福である人」57.1%を比較していく。

2.3 独立変数

独立変数は「生活満足度」である。つぎのように質問した。

質問：あなたは生活全般に満足していますか、それとも不満ですか。(1つだけ)

選択肢：1 満足している 2 どちらかといえば満足している 3 どちらともいえない 4 どちらかといえば不満である 5 不満である

5段階あり、すべてに意味が付与されている。「わからない」は分析から除外した。分布は図1のとおりである。主観的幸福感とおなじく、中間点である3どちらともいえないが21.2%で最多だった。2どちらかといえば満足と1満足の合計は50.6%いて、これも先行研究とおおむね一致する。なお、主観的幸福感の中間点の比率20.3%と、生活満足度の中間点の比率21.2%には、出現可能性に統計的な差がなかった。

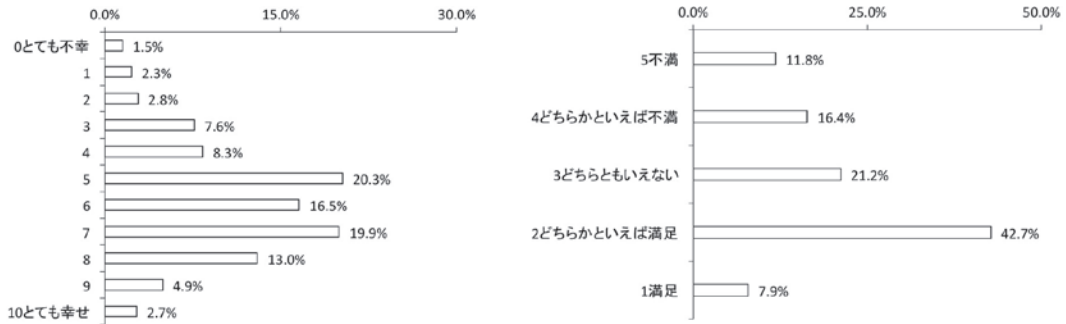


図1 主観的幸福感（左）と生活満足度（右）の分布 (N=2,497)

2.4 グループ変数

グループ間の比較をするために、性別（男女の2グループ）、年齢（20代、30代、40代、50代、60代の5グループ）、婚姻状態（未婚、既婚、離死別の3グループ）をまず属性変数として使用する。

さらに、階層変数として、学歴（中卒、高卒、短大・高専卒、大学・大学院卒の4グループ）、従業上の地位（正規雇用・役員、非正規雇用、自営・家族従業員・内職、無職の4グループ）、世帯収入（549万円以下、1049万円以下、1150万円以上の3グループ）をもちいる。国民生活基礎調査によれば、2011年の平均世帯収入が548万2千円だった。そこで、おおむねこれ以下、その倍以下、それ以上とわけた（比率は表1、度数は表3）。

3 分析結果

3.1 「幸福な人」「満足な人」のグループ別比較

幸福な人と満足な人の比率をグループ別に比較したところ、図2、表3となった。その結果、すべてのグループで、幸福な人の比率が満足な人より高かった。

性別では女性ほど、幸福な人も満足な人も多かった。年齢別ではどちらもU字カーブをえがき、40代を底として年配者ほど多かった。婚姻状態別では、どちらも既婚者でもっとも多く、離死別者がつづき、未婚者でもっとも少なかった。

これらはすべて、カイ二乗検定により0.1%水準でグループ間で有意に異なっていた。こうした違いは、先行研究と一致している（性別の効果についてはInglehart 1990、年齢の効果はBlanchflower and Oswald 2007、婚姻状態の効果はTsang et al. 2003、日本における総合的な効果は筒井 2010 参照）。

階層変数についてはどうか。学歴別では、学歴が高くなるほど満足な人も幸福な人もふえた。従業上の地位別では、どちらも無職でもっとも多い。自営はそれについて幸福な人が多いが、満足な人はもっとも少ない。正規雇用は幸福な人がもっとも少ないが、満足な人は無職のつぎに多い。非正規雇用は自営と正規雇用の中間であった。世帯収入別では、多くなるほどどちらの人もふえた。

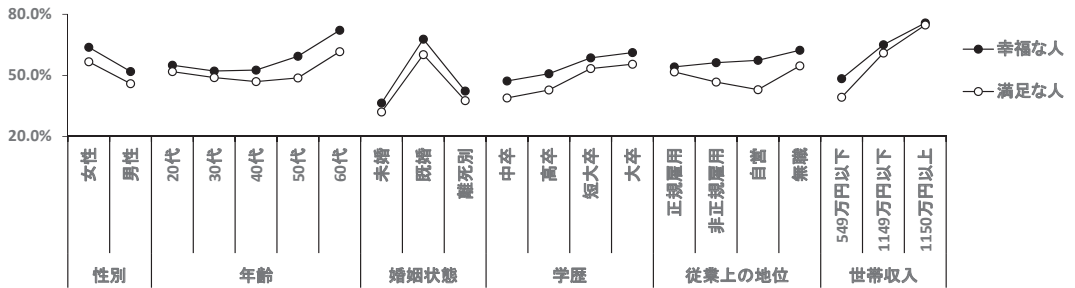


図2 「幸福な人」と「満足な人」の比率のグループ別比較

注意：N=2,497。「幸福な人」とは主観的幸福感到6～10点と回答した人、「満足な人」とは生活満足度に1～2と回答した人。数値は表3参照

表2 「満足な人」と「幸福な人」のクロス表 (行パーセント)

	不幸な人	幸福な人
不満な人	860 (69.7%)	373 (30.3%)
満足な人	211 (16.7%)	1053 (83.3%)

注意：N=2,497。「幸福な人」とは主観的幸福感到6～10点と回答した人、「不幸な人」とはそれ以外。「満足な人」とは生活満足度に1～2と回答した人、「不満な人」とはそれ以外

これらはすべて、カイ二乗検定により有意に異なっていた (学歴と世帯収入は0.1%水準、従業上の地位は1%水準)。また、先行研究ともおおむね一致していた (学歴の効果は筒井 2010、職業の効果はBlanchflower 2007、収入の効果はLane 2000 参照)。

3.2 満足と幸福の不一致

では、生活満足度は、どれくらい主観的幸福感と一致しているのだろうか。そこで、満足な人かどうかと、幸福な人かどうかでクロス表を作成した (表2)。これによると、なるほど生活に不満な人は不幸と、満足している人は幸福とかんじやすいことはたしかである (カイ二乗検定の結果0.1%水準で有意)。

とはいえ、全体では584人23.4%の人が、満足と幸福で一致しなかった。2パターンあり、第一に不満であるにもかかわらずそのうち30.3%が幸福と回答していて、ポジティブな不一致が3割いた (図3)。第二に、満足なのに16.7%が不幸であり、ネガティブな不一致が1.5割いた。帰無仮説を「こうした人がいない」としてt検定をおこなった結果、どちらも偶然ではなく出現していた (0.1%水準で有意)。ちなみに、カイ二乗検定の結果、「不満だが幸福な人」30.3%のほうが、「満足だが不幸な人」16.7%より有意に多かった (0.1%水準)。

以上から、仮説1「生活満足度と主観的幸福感が一致しない人がいるだろう」は支持されたといえる。両者は似ているが、人びとの意識の中で完全に一致するわけではないようである。

なお、もともとの11段階の主観的幸福感と5段階の生活満足度について、(生活満足度の値を逆転させたうえで) 相関係数をもとめたところ、0.676であった (0.1%水準で有意)。クロンバック

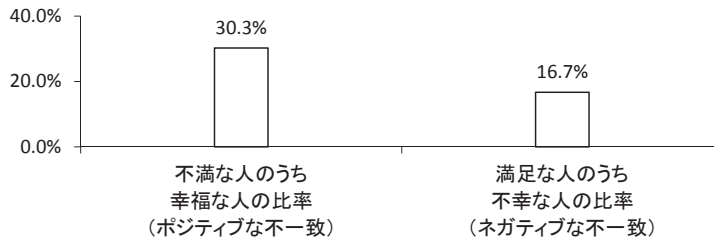


図3 満足と幸福が不一致な人の比率

注意：「幸福な人」とは主観的幸福感に6～10点と回答した人。「満足な人」とは生活満足度に1～2と回答した人。

のアルファは0.729であった。

3.3 「不満だが幸福な人」「満足だが不幸な人」のグループ別比較

それでは、主観的幸福感と生活満足度が一致しないのは、どのような人なのだろうか。「不満だが幸福」というポジティブな不一致と、「満足だが不幸」というネガティブな不一致にわけて、グループ別に比較した（図4、表3）。

まず、性別、年齢、婚姻状態別に比較しよう。不満だが幸福な人の現れ方は、幸福な人の現れ方と完全に同じパターンとなっていた。女性ほど、(40代を底として)年配者ほど、既婚者ほど、不満がある人の中の比率が高かった（すべてカイ二乗検定で有意）。とくに60代では、45.9%と不満な人のほぼ半分が、不幸と回答しそうだが幸福とかがえていた。既婚者では39.4%がそうだった。

満足だが不幸な人の現れ方は、おおむねこれと逆のパターンとなっていた。男性ほど、若い人ほど、未婚者ほど、多かった。とくに、未婚者で27.9%と多かった。ただし、年齢による違いはカイ二乗検定で有意ではなかった（傾向は観察できた）。

つぎに、学歴、従業上の地位、世帯収入という社会階層による違いはあるのだろうか。第一に、不満だが幸福な人は、学歴が高いほど、自営や無職ほど、世帯収入がおおむね多いほど、多かった。ただし、学歴と従業上の地位による違いは、有意ではなかった。

第二に、満足だが不幸な人は、高卒や短大卒ほど、正規雇用や自営ほど、世帯収入が少ないほど、

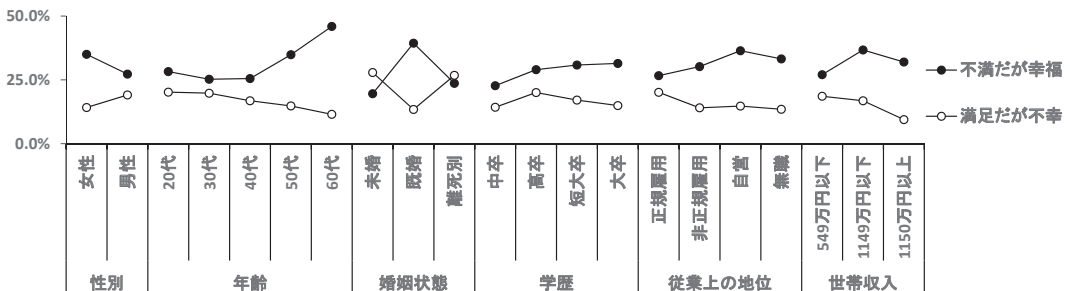


図4 「不満だが幸福な人」と「満足だが不幸な人」の比率のグループ別比較

注意：N=2497。「不満だが幸福な人の比率」は「不満な人」の中における比率を、また「満足だが不幸な人の比率」は満足な人の中における比率をあらわす。数値は表3参照

多かった。ただし、学歴の効果は有意ではなかった。

以上から、仮説2「社会階層が高い人ほど不満だが幸福というポジティブな不一致が多く、社会階層が低い人ほど満足だが不幸というネガティブな不一致が多いただろう」は一部支持された。世帯収入が多いほど、ポジティブな不一致がふえネガティブがへった。たとえ生活に不満があっても、収入によって幸福感がカバーされるようだ。

ただし、学歴による違いはなかった。生活満足度と主観的幸福感の関連は、過去の学歴より現在の働き方や収入によってきまるようである。また、正規雇用者ほどネガティブな不一致が多かった。労働することは、利益をもたらすとともにコストを要求するためかもしれない。

4 考察

4.1 まとめ

(1) この論文では、生活満足度が主観的幸福感と一致するのかを検討した。そのために、2013年社会と暮らしに関する意識調査(SSP-W2013-2nd)データを分析した。

(2) 満足と幸福が一致しない人は、全体で23.4%いた。そのうち「生活に不満があるのに幸福」というポジティブな不一致の人は、不満な人のうち3割いた。とくに60代で45.9%と多かった。逆に「満足しながら不幸」というネガティブな不一致は、1.5割いた。とくに未婚者で27.9%と多かった。

(3) 女性ほど、年配者ほど、既婚者ほど、世帯収入が多いほど、「不満だが幸福」というポジティブな不一致が有意にふえ、「満足だが不幸」というネガティブな不一致が有意にへった。ただし、学歴や従業上の地位による違いはほとんどなかった。

(4) 以上から、生活満足度と主観的幸福感はたしかに似た概念であるが、差異も無視できないといえる。もし満遍なく不一致がおこっているなら、大きな問題ではないかもしれない。しかし、とくに性別、年齢、婚姻状態、世帯収入によって不一致の度合いが異なっていた(学歴と従業上の地位では違いは少なかった)。したがって、両者を同一視するには慎重であるべきだろう。

4.2 不一致の理念型

今回の分析から、どのような人が不一致となりやすいのだろうか。つぎのように理念型を想定すると、具体的にイメージしやすいかもしれない。

(1) 60代の既婚女性で、大学を卒業し自営業をいとなみ、平均以上の世帯収入をえている人を想定しよう。そうした人は、たとえ生活に満足していなくても、幸福とかんじることができるかもしれない。

(2) たいして、ある人は20代の未婚男性で、高卒の正規雇用ではたらいっているが、世帯収入は平均以下だとする。そうした人は、生活に満足していても、幸福感をえられない可能性が高い。

4.3 今後の課題

(1) 今回はインターネット調査データを分析したため、代表性を確保できなかった。そこで、今回の結果をランダムサンプリング調査データで確認する必要があるだろう。

(2) 先行研究から、失業中の人ほど (Di Tella et al. 2001)、育児中の人ほど (Spanier and Lewis 1980)、宗教を信仰しない人ほど (Diener et al. 1999)、幸福感が低下することがわかっている。これらのグループ間で、不一致の度合いを比較することもできるだろう。

(3) 今回はグループ間の比較に焦点をしばった。多変量解析をおこなえば、変数間の交互作用や効果の強弱を明確にすることができるかもしれない。

(4) 主観的幸福感の分析には、国際比較の必要性が指摘されてきた (Hommerich and Klien 2012)。今回の結果を他国と比較することで、日本社会の普遍性と独自性をより明らかにできるだろう。

【謝辞】

この研究は、SSP プロジェクト (<http://ssp.hus.osaka-u.ac.jp/>) の一環としておこなわれたものである。SSP-W2013-2nd データの使用にあたっては SSP プロジェクトの許可をえた。

【文献】

- Blanchflower, D. G. 2007. "Entrepreneurship in the UK." IZA Discussion Paper 2818.
- Blanchflower, D. G. and A. J. Oswald. 2007. "Is Well-being U-Shaped over the Life Cycle?" NBER Working Paper 12935.
- Diener, E., E. M. Suh, R. E. Lucas, and H. E. Smith. 1999. "Subjective Well-Being: Three Decades of Progress." *Psychological Bulletin* 125: 276-302
- Di Tella, R., R. J. MacCulloch, and A. J. Oswald. 2001. "Preferences over Inflation and Unemployment: Evidence from Surveys of Happiness." *American Economic Review* 91: 335-341.
- Easterlin, R. 1974. "Does Economic Growth Improve the Human Lot? Some Empirical Evidence." P. A. David and M. W. Reder eds. *Nations and Households in Economic Growth: Essays in Honor of Moses Abramovitz*. Academic Press.
- Hommerich, C. and S. Klien. 2012. "Happiness: Does Culture Matter?" *International Journal of Wellbeing* 2 (4): 292-298.
- Inglehart, R. 1990. *Culture Shift in Advanced Industrial Society*. Princeton University Press.
- Lane, R. E. 2000. *The Loss of Happiness in Market Democracies*. Yale University Press.
- 島井哲志・大竹恵子・宇津木成介他, 2004, 「日本版主観的幸福感尺度 (Subjective Happiness Scale: SHS) の信頼性と妥当性の検討」『日本公衆衛生雑誌』51(10): 845-853。
- 白石賢・白石小百合, 2010, 「幸福の経済学の現状と課題」大竹文雄・白石小百合・筒井義郎編『日本の幸福度: 格差・労働・家族』日本評論社。
- Sirgy, M. J. 2012. *The Psychology of Quality of Life: Hedonic Well-Being, Life Satisfaction, and Eudaimonia*. Springer.
- Spanier, G. B. and R. A. Lewis. 1980. "Marital Quality: A Review of the Seventies." *Journal of Marriage and*

the Family 42: 812-839.

Tsang, L., C. Harvey, K. Duncan, and R. Sommer. 2003. "The Effects of Children, Dual Earner Status, Sex Role Traditionalism, and Marital Structure on Marital Happiness Over Time." *Journal of Family and Economic Issues* 24(1): 5-26.

筒井義郎, 2010, 「なぜあなたは不幸なのか」大竹文雄・白石小百合・筒井義郎編『日本の幸福度: 格差・労働・家族』日本評論社。

【付録】

表3 「幸福な人」「満足な人」「不満だが幸福な人」「満足だが不幸な人」の比率のグループ別比較

グループ	度数	幸福な人の比率	満足な人の比率	不満だが幸福な人の比率	満足だが不幸な人の比率
全体	2497	57.1%	50.6%	30.3%	16.7%
性別					
女性	1094	63.8% ***	56.7% ***	35.0% **	14.2% *
男性	1403	51.9%	45.9%	27.3%	19.1%
年齢					
20代	382	55.0% ***	51.8% ***	28.3% ***	20.2% †
30代	589	52.1%	48.9%	25.2%	19.8%
40代	620	52.6%	46.9%	25.5%	16.8%
50代	554	59.4%	48.7%	34.9%	14.8%
60代	352	72.2%	61.6%	45.9%	11.5%
婚姻状態					
未婚	877	36.4% ***	32.0% ***	19.6% ***	27.9% ***
既婚	1620	67.8%	60.2%	39.4%	13.4%
離死別	149	42.3%	37.6%	23.7%	26.8%
学歴					
中卒	36	47.2% ***	38.9% ***	22.7%	14.3%
高卒	862	50.8%	42.8%	29.0%	20.1%
短大・高専卒	285	58.6%	53.3%	30.8%	17.1%
大学・大学院卒	1314	61.2%	55.5%	31.5%	15.0%
従業上の地位					
正規雇用・役員	1095	54.2% **	51.7% **	26.7% †	20.1% *
非正規雇用	441	56.2%	46.7%	30.2%	14.1%
自営・家族従業員・内職	284	57.4%	43.0%	36.4%	14.8%
無職	677	62.3%	54.7%	33.2%	13.5%
世帯収入					
549万円以下	1315	48.4% ***	39.2% ***	27.0% **	18.6% *
1149万円以下	984	65.0%	61.0%	36.7%	16.8%
1150万円以上	198	75.8%	74.7%	32.0%	9.5%

† $p < .10$; * $.05$; ** $.01$; *** $.001$ (カイ二乗検定でグループ間に比率の差があるかをしらべた)

注意: 「幸福な人」とは主観的幸福感に6~10点と回答した人。「満足な人」とは生活満足度に1~2と回答した人。「不満だが幸福な人の比率」は「不満な人」の中における比率を、また「満足だが不幸な人の比率」は満足な人の中における比率をあらわす

成蹊大学文学部紀要

第 49 号

目 次

致平親王年譜—付 関連和歌資料集成— ……………	桜井宏徳 ……	1
<hr/>		
イギリスの日本文学・文化研究 ……………	吉田幹生 ……	19
象徴天皇制の成立過程にみる政治葛藤 —1948年の側近首脳更迭問題より— ……………	茶谷誠一 ……	25
世界のつながり方に関する覚え書き ……………	堀内正樹 ……	61
通訳者とコミュニケーション ……………	森住史 ……	87
教育実習における協同学習の広がり ……………	喜岡淳治 ……	103
武蔵野市のコミュニティ政策（政策定着期） —コミュニティセンター建設からコミュニティづくりへ— ……………	高田昭彦 ……	119
1870年代の新聞投書者の動向に関する一考察 ……………	石堂彰彦 ……	155
21世紀における惑星的想像力 globe の濫用についての一考察 ……	下河辺美和子 ……	173
アボリジニ社会から構造主義へ3 —土地と親族をめぐるアボリジニ社会の構造— ……	門口充徳 ……	189
生活に満足している人は幸福か ：SSP-W2013-2nd 調査データの分析 ……………	小林 盾、カローラ・ホメリヒ ……	229
<hr/>		
講演会、研究会記録（2013年1月～12月） ……………		239

成蹊大学
文学部学会

2014年3月

Bulletin of the Faculty of Humanities

Seikei University

No.49

CONTENTS

YOSHIDA, Mikio: Japanese Literature and Cultural Studies in the UK	19
CHADANI, Seiichi: A Political Conflict in the Making of Symbolic Emperor System	
— Reshuffling of Imperial Household Office Staff in 1948 —	25
HORIUCHI, Masaki: A Note on the Connectedness of the World	61
MORIZUMI, Fumi: Interpreting and communication	87
KIOKA, Junji: Expanse of the cooperationlearning in the student teaching	103
TAKATA, Akihiko: The Second Stage of Community Policy in Musashino City	119
ISHIDO, Akihiko: A Study of Contributors to Newspapers in 1870s	155
SHIMOKOBE, Michiko: Planetary Imaginings in the 21st Century: Catachresis of 'globe'	173
KADOGUCHI, Mitsunori: From Aboriginal Society toward Structuralism 3	
: The Structure of Aboriginal Society on Land and Kin	189
KOBAYASHI, Jun; Carola HOMMERICH: Are Satisfied People Happy?	
: Analyses of SSP-W2013-2nd Survey Data	229
<hr/>	
SAKURAI, Hironori: Biographical Notes of Prince MUNEHIRA	
: and Collection of WAKA Poems in Connection with Him	1
<hr/>	
Reports of Lectures and Research Meetings (January – December, 2013)	239

Seikei University
Musashino-shi, Tokyo
March, 2014